

経営企画部門

病院経営分析のためのExcelスキル ● 第2回

付随情報をしっかり加えることが 報告書の完成度を高める

ゴールドenルール・コンサルティング株式会社代表
芦田弘毅

図1 病床稼働経時変化についてのグラフ

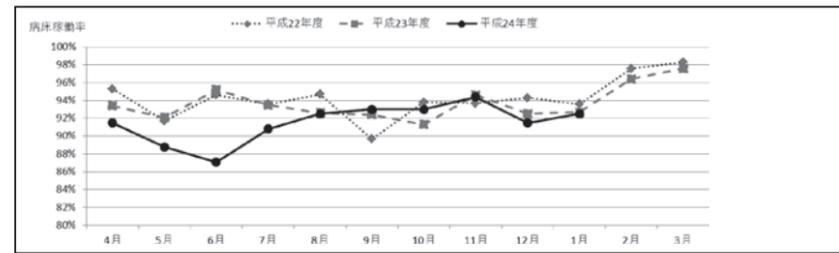


図2 ルーチン付随情報を加えた「病床稼働経時変化についてのグラフ」

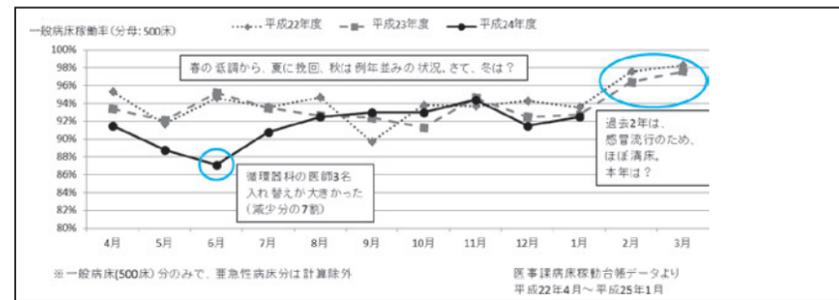


図3 ルーチン以外の情報も加えた「病床稼働経時変化についてのグラフ」

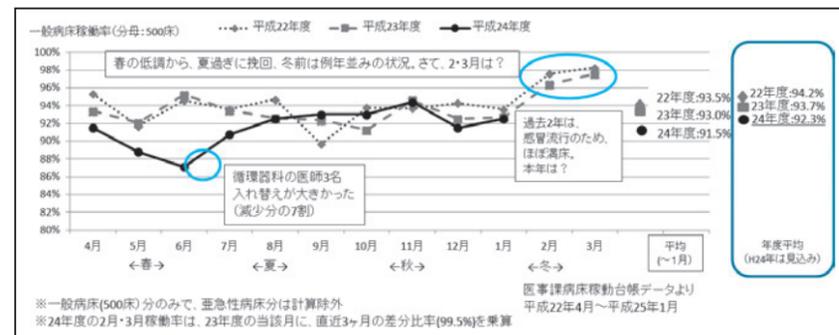


図5 平均算出におけるセルが空白(空白)・ゼロでの結果の違い

	A3	=AVERAGE(B3:E3)			
1	第1~4回までの平均得点				
2	平均	第1回	第2回	第3回	第4回
3	26.7	10	20	0	50
4	20.0	10	20	0	50

DATA
 ゴールドenルール・コンサルティング株式会社
 東京都渋谷区渋谷2-7-14
 中村ビル5F
 TEL: 03-6427-6382
 E-mail: info@g-rules.co.jp
 URL: http://g-rules.co.jp/

とを推奨します。
■連動データは数式で残しておく
 「連動データ」とは、元のデータから二次的に算出されるデータのことです。今回の事例でいえば、各月の稼働データから算出される「平均データ」などが該当します。

今回お伝えしたい資料作成のコツは、この「連動データ」は、「数式ではなく数式で残しておく」ということです。数式を残しておくことで、元データを変えたりつけ加えれば、自動的に連動してこちらの数字・グラフが変化します。それによって、データを変えたときに「連動データ」の修正忘れを

防げますし、後からでも「連動データ」の計算式を確認できるので便利です。
 ちなみに、エクセルにおいては、アベレージ関数「=average(データ範囲)」を入れれば、平均値を自動計算してくれます。「データ範囲」においてセルがブランクの場合、平均算出分母には入りませんが、ブランクにゼロが入れば平均算出分母に入るので、意識して使い分けをしましょう。図5でも、台と、ゼロにした場合の平均値が違うことがわかります。

■マストな付随情報は習慣化してあげる
 前号では、病床稼働経時変化グラフ(図1)について言及しましたが、今号ではグラフの「付随情報」について、考えていきましょう。
 まず、マスト(記入必須)な「付随情報」として、次の5項目を挙げます。
 ①タイトル: この図が何の分析かを端的に説明
 ②データ出典: 期間・データ数(n数)
 ③考察・コメント: メッセージ・ガイド
 ④注意書き: 除外条件・計算式など補足事項
 ⑤軸ラベル・見出し: X軸・Y軸の説明、単位
 もちろん、よほど明らかな場合は書きませんが、たとえ院内資料であっても「自分以外に見せる」グラフであれば、この5条件の記載について欠落がないかのチェックを習慣(ルーチン)にしましょう。作り手にしてみれば当たり前で、書き込むのも「面倒くさい」情報も多いかもしれません。しかし、これらの記載を基本書式(フォー

マット)と自分のなかでしてしまえば、「いろいろな読み手が感じるのである」第1段階の質問に、そのまま自身で答えることができるのです。つまり、「質問してくれば答えるのに」ではなく、製作者が質問を聞けない状況であっても、資料が勝手に自分分で説明してくれるというわけです。
■メッセージにつながる「付随情報」をつける
 次に、それぞれの図によって臨機応変に加える「付随情報」も紹介しましょう。
 「お仏壇には魂が必要」であるように、図そのものの存在意義として、「メッセージ(伝えたいこと)」がなければ意味がありません。そして、それを補強するための補足情報(手にとってメッセージがより明確に伝わるようになります)。
 今回は、病床稼働経時変化グラフから、「今年の病床稼働は昨年・一昨年と比べて良いのか・悪いのか」ということを伝えたいわけですから、これまでの平均を年ごとに算出して、図中に加えることも有効

でしょう。
 ここで注意すべきは、本年度はまだ途中(1月時)なのに、前年度までの平均だけ12カ月で計算することのないように、ということですね。前号で述べたように、月ごとで稼働傾向が異なる以上、条件は揃えて3カ年も同じ4月~1月から算出すべきです。
 さらに、年度全体の見通して、このペースで3月までいった場合の稼働見込みを立ててもよいかもしれません。上場会社は四半期で決算発表をしますが、通常、そのとき、通期・次期の予想も発表します。だからこそ、行き当たりばったりではない信頼を市場に与え、早い段階で明示された仮説があるからこそ、期中の異常状況が明確になるわけです。
 過去のパターンを元に、今年の変動要素を「何らかの定義」で加味して算出していくわけですが、あくまでも仮説であり、誰であろうと完璧な予想はできません。その後の状況を見極めながら、上方・下方修正して精度を高めていけばいいのです。あまり神経質にならずに、自分たちで定めた定義にそって大胆に仮説を立案するこ